葛飾為一遺墨

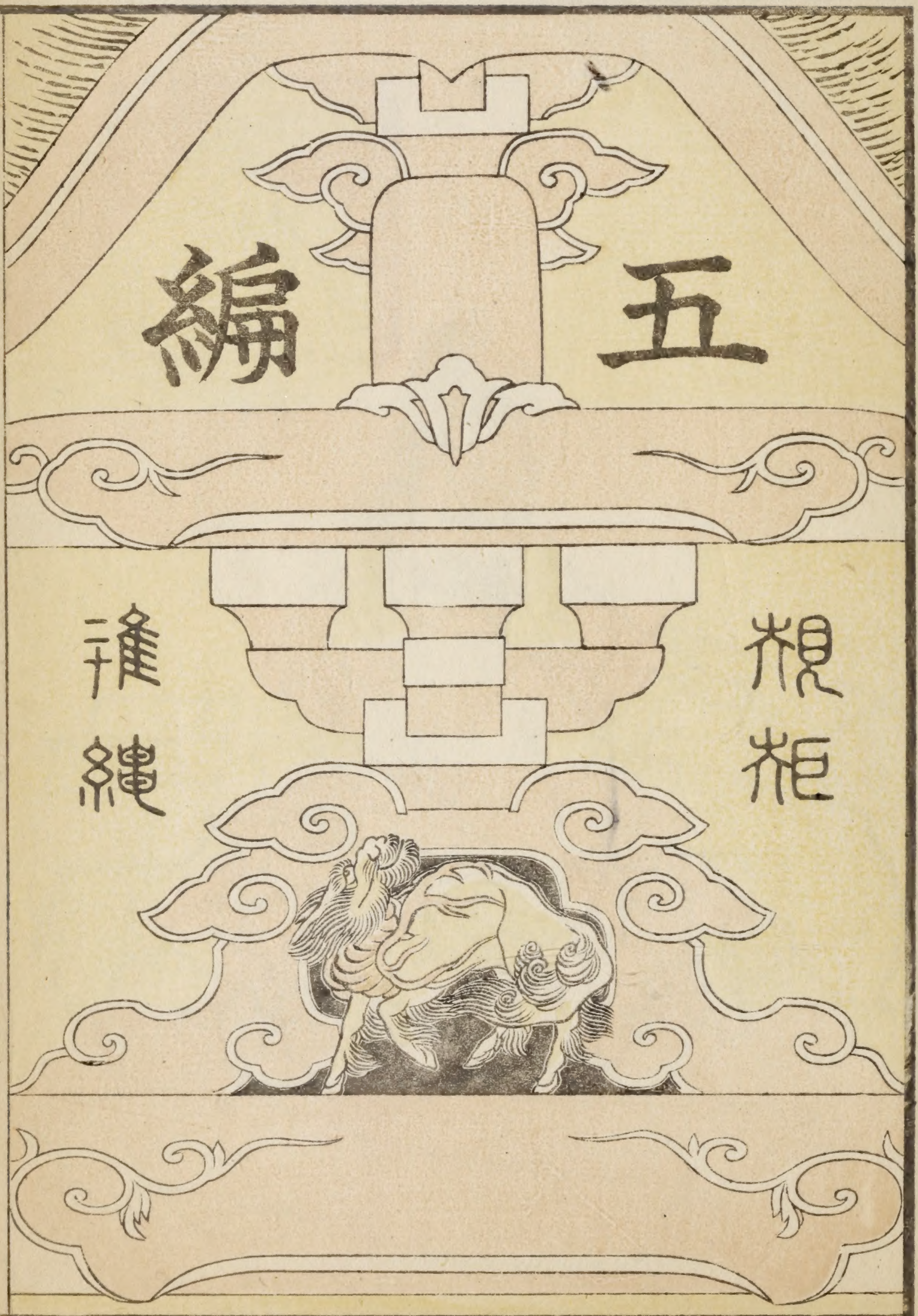
北齋漫畫五編

全

桜の屋のあるじまづつみのゆくりかなんよのなかぢ
やまきしぬの萩てしきまのきく此いつくしみは
かつしかのおきなとゝまて其秋のあはれをしる
く中きつゞひてみちてきりいひつねまづくさん
のしきるめしを北斎のたきれいとやしまくさ
このもうるたよめる人まくそのりんたわくさん
ねる事いはゞこのいつくしみのをこのたがひりしまい
まさりねべしさうゝろ漫画くさうけし
手にみ本まへりて物らくしれしはづ人のめて

人やまたはぞうこしを発ひく鶉よいて
の巻くわりてかのわづかしかぞふるたぐひ
のありさまをかずしらずしるしそめなば
乃たたくみなる手つひまとかりあつまふ
本意のむもいかなるとや筆つくすひとひ
ほくるしびふみのたゞしさとみえん人ぞ
おまかいろうべいたりなんかし

六樹園


五編
規矩
準繩

手置帆負命



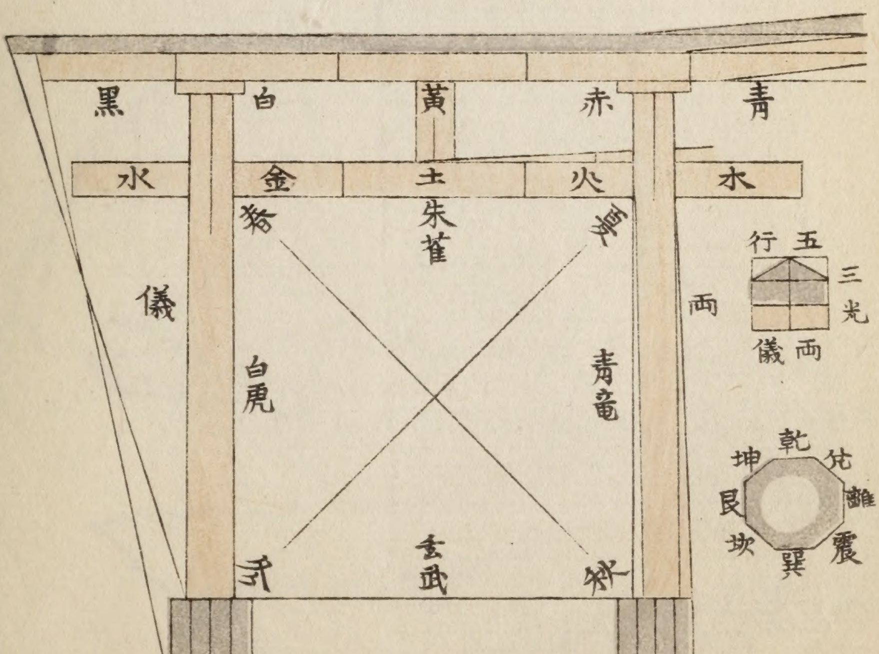


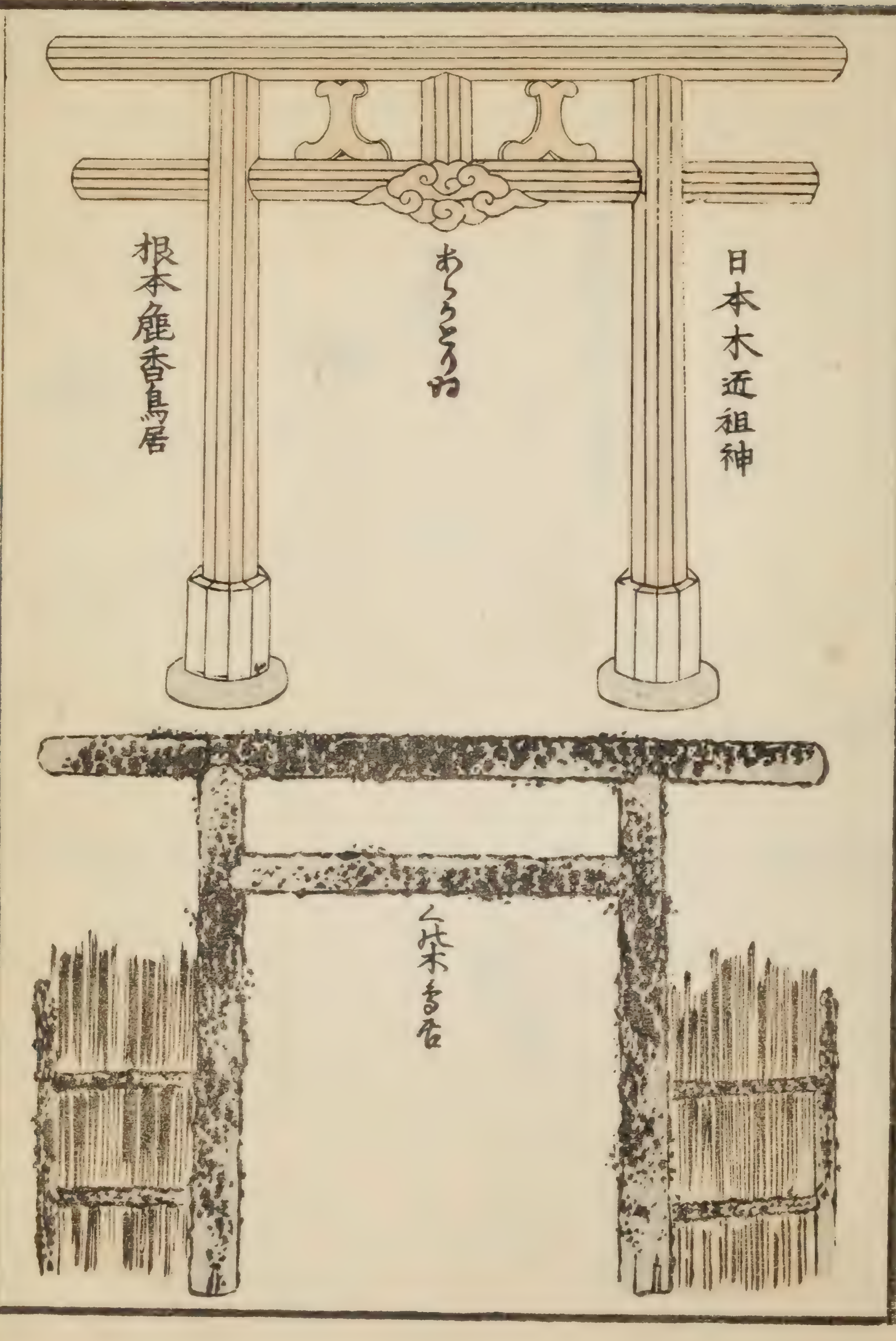
天彦根知命

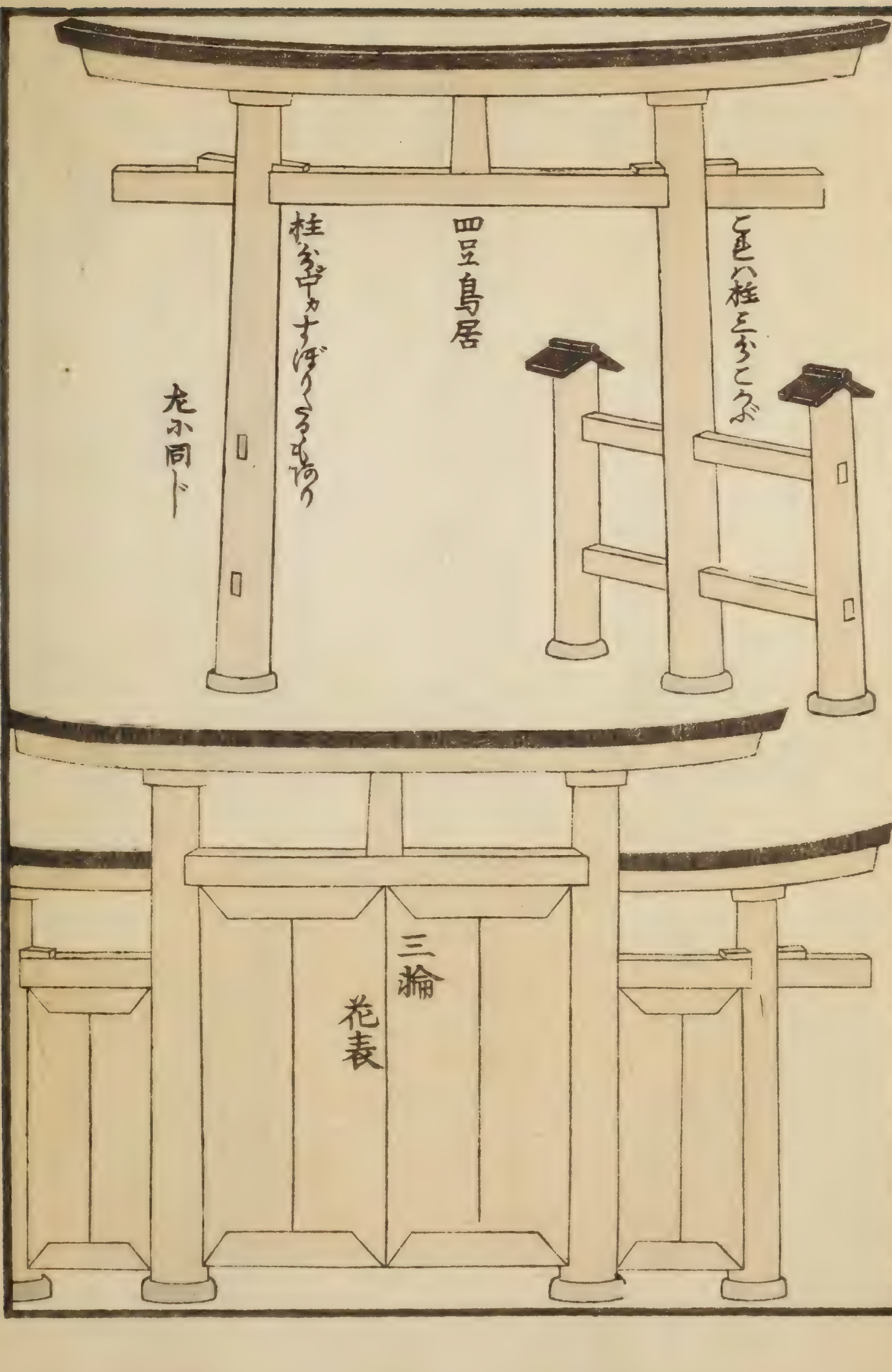
宮室を画く心得乃事

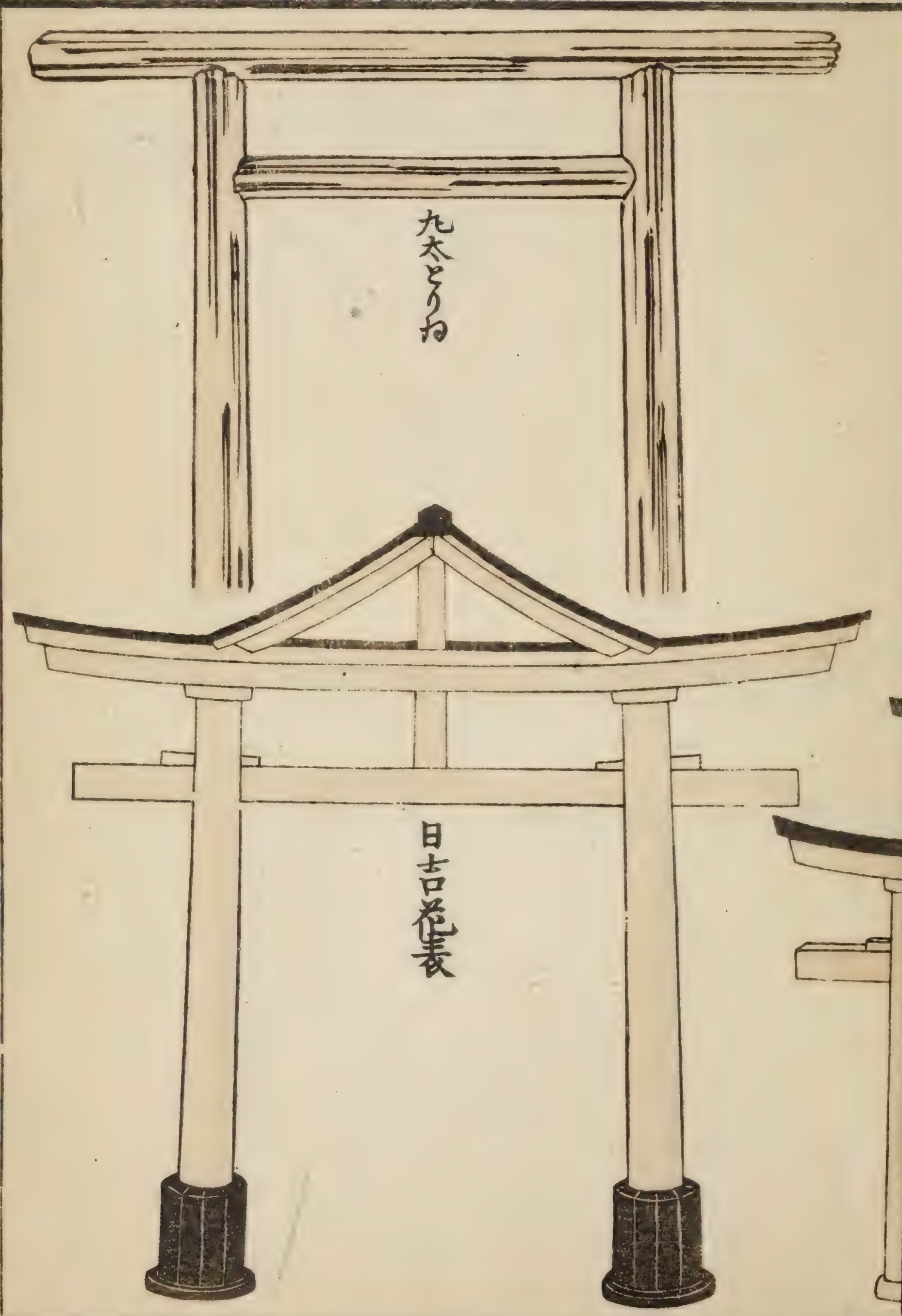
画家の流々其秘なる事多く漫説するを
せざれバ尺寸の相違をわきまへて古人も
是を詳に画くる事をせずと適〻形を必
まるといへども多く密画して俗眼を悦む
あるひ己が不知の妄を庇ふ口、臨本をかり
て古人のあやまちを我上に引うけ後世の
識を知らざるの族画を学ぶとして古人を
まよはすといふべし

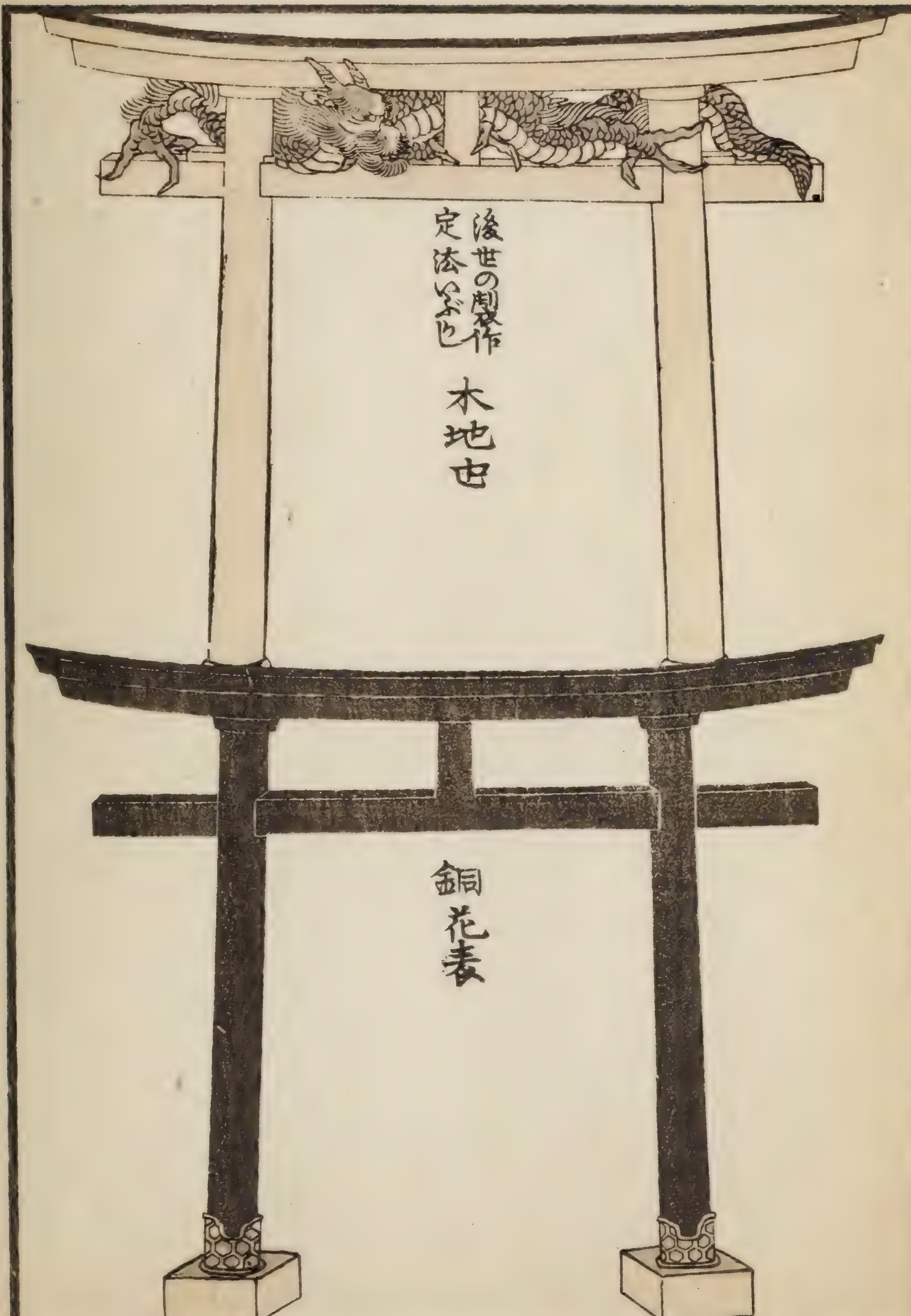
二両儀 三日月星 四四季 五五行
七七星 八八課 九九曜
この数を眼前の形其長短に引当て考ふる
ときハ宮殿楼閣といへども画るに安かるべし

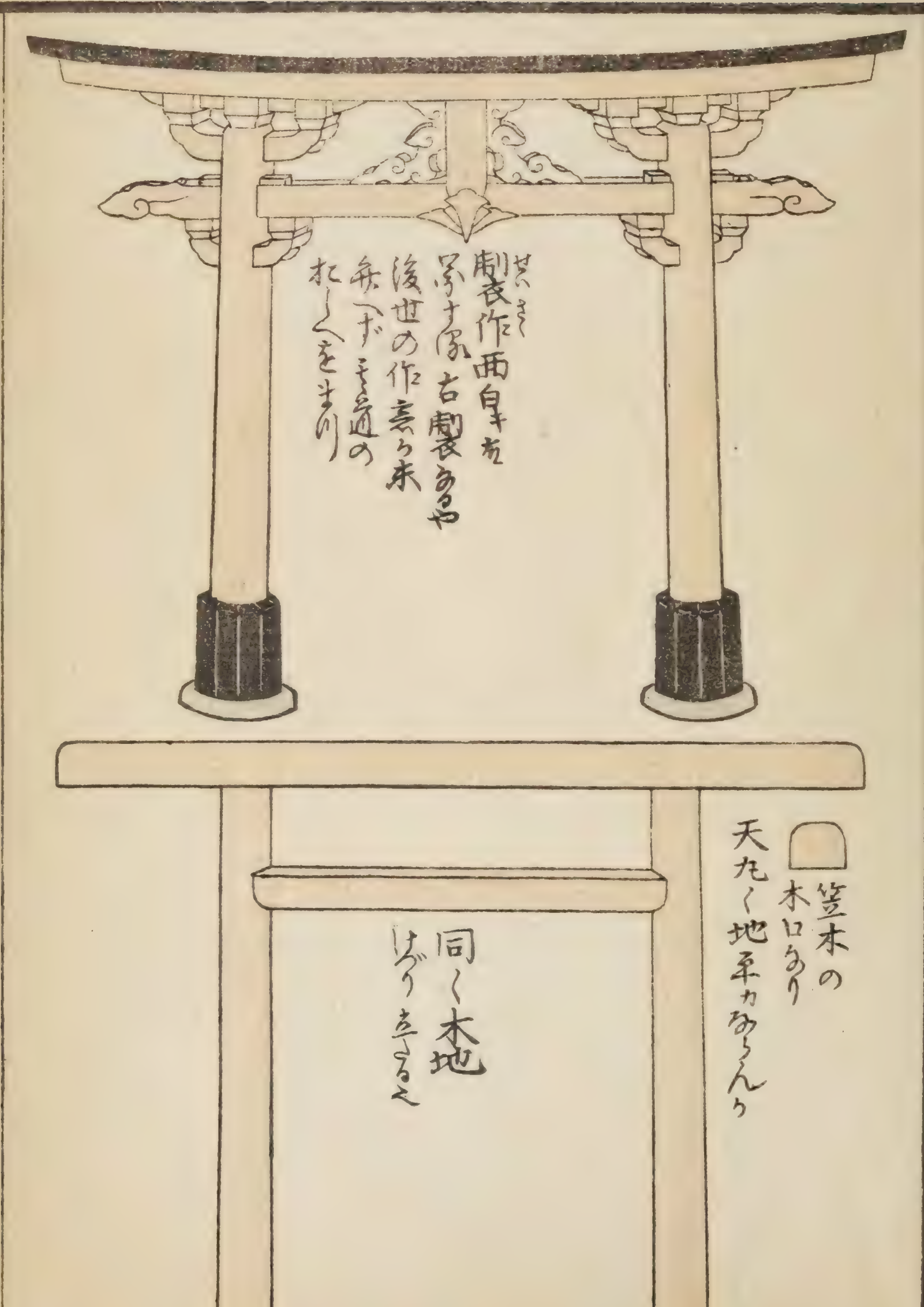


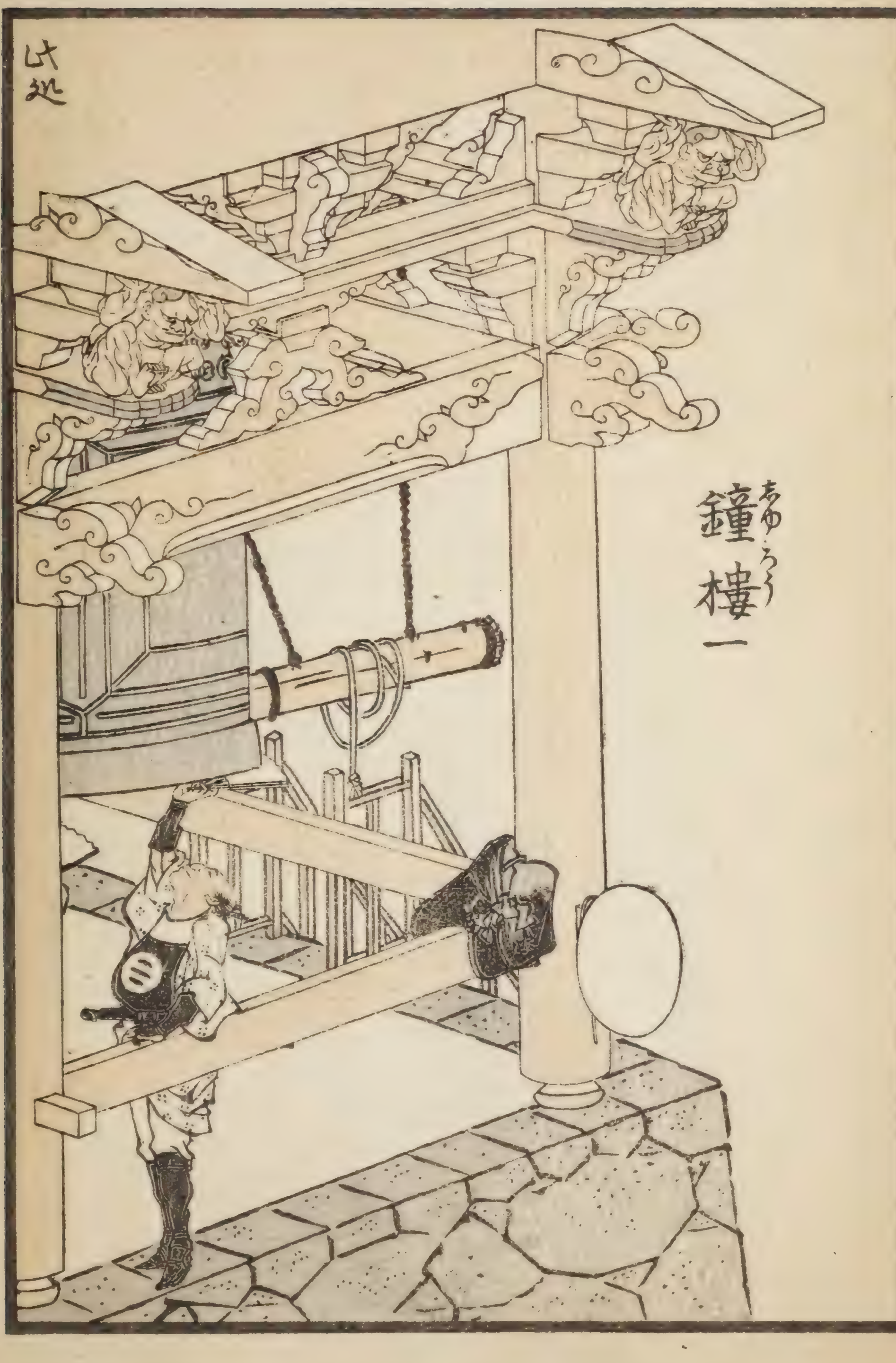

日本木近祖神
あらうとりゐ
根本鹿香鳥居
黒木鳥居


四足鳥居
三輪
花表

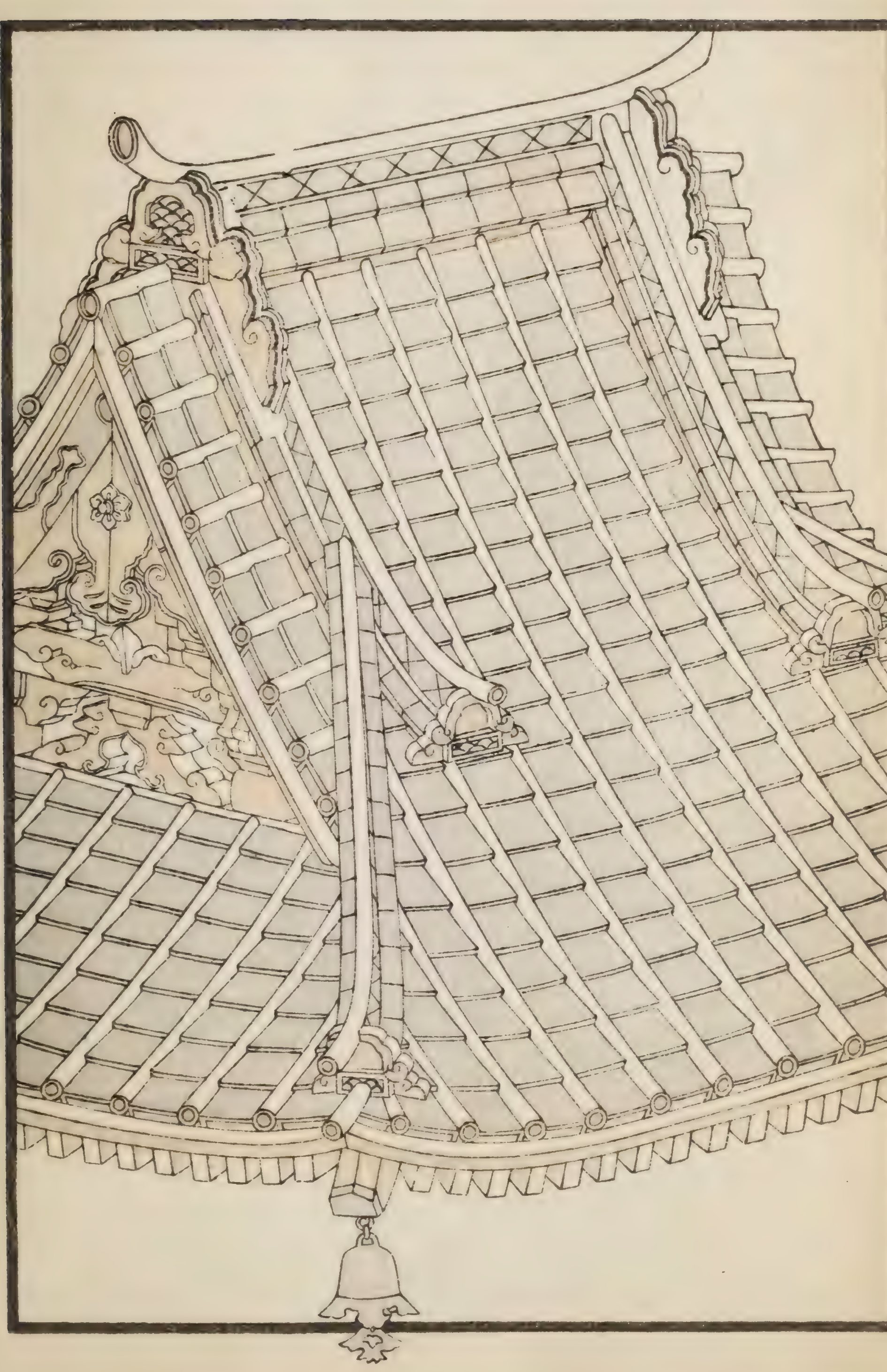

九太とりゐ
日吉花表

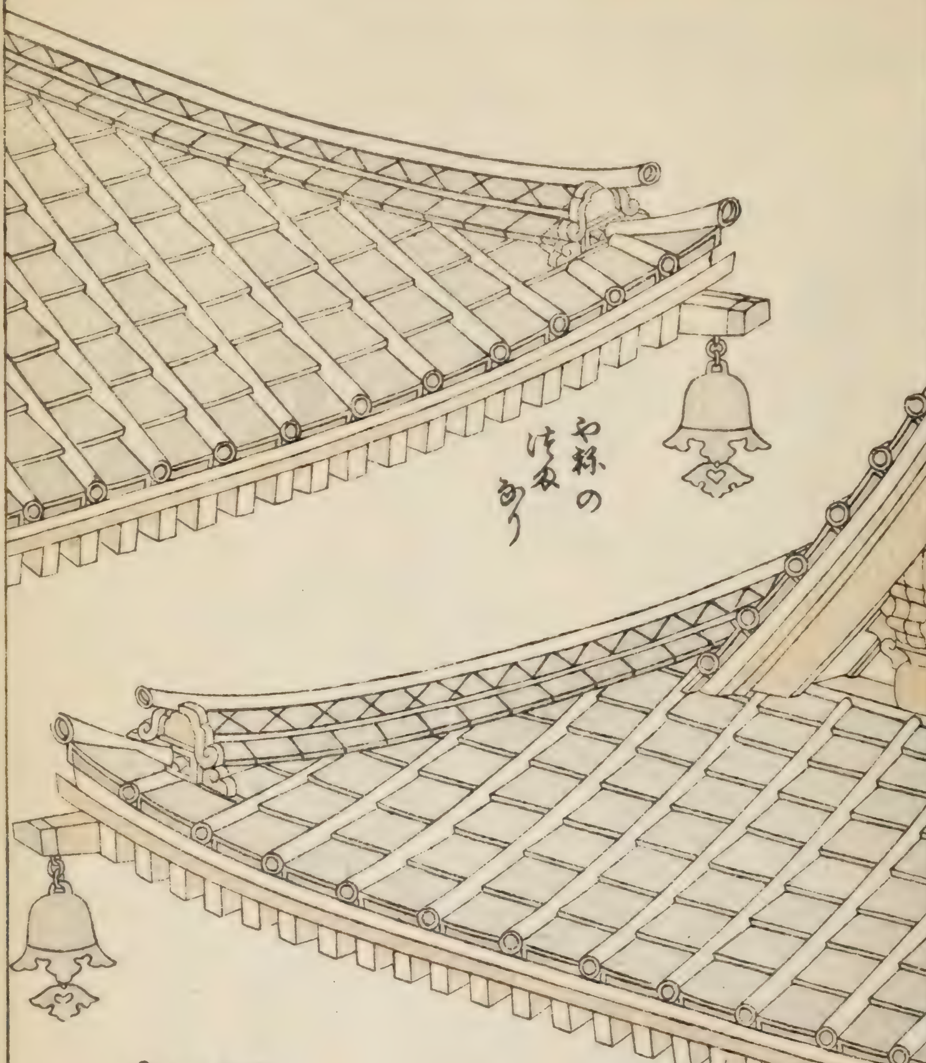

後世の製作
定法いぶし
木地也
銅花表


笠木の
木口なり
同く木地


此処
鐘楼（しゆろう）一


家根
製作致し有べし
次の編に写す





其二

鐘樓(しゆろう)之(の)家根(やね)


古鐘（こしゆう）
生滅々已（しやうめつめつい）
是生滅法（ぜしやうめつほふ）


寂滅爲樂
四句之文刹鬼
諸行無常

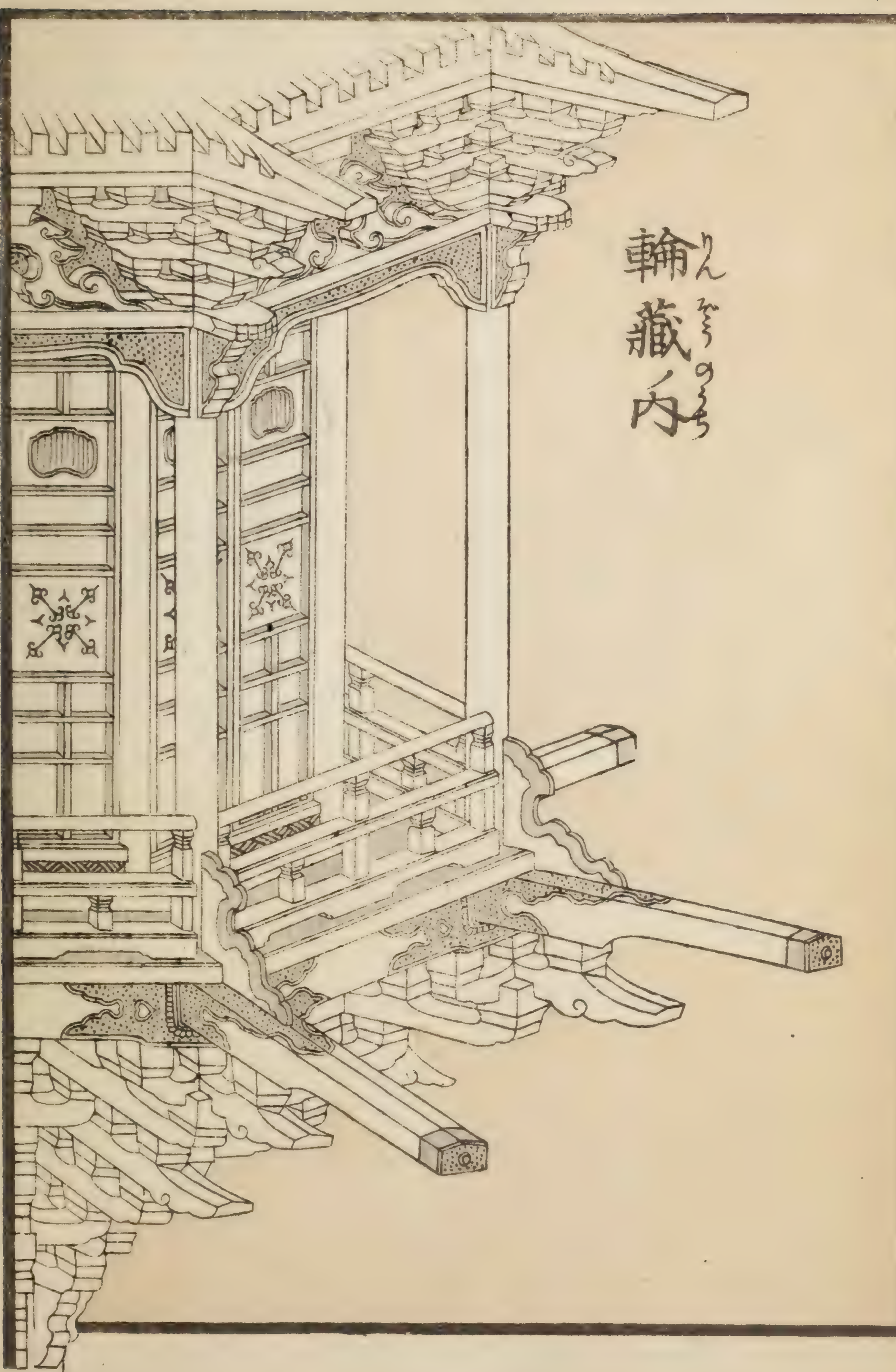

傅大士（ふだいし）
普建（ふけん）

一切経を見ずかしめを
一挫八面の輪蔵を作り
末世ふ残しおく

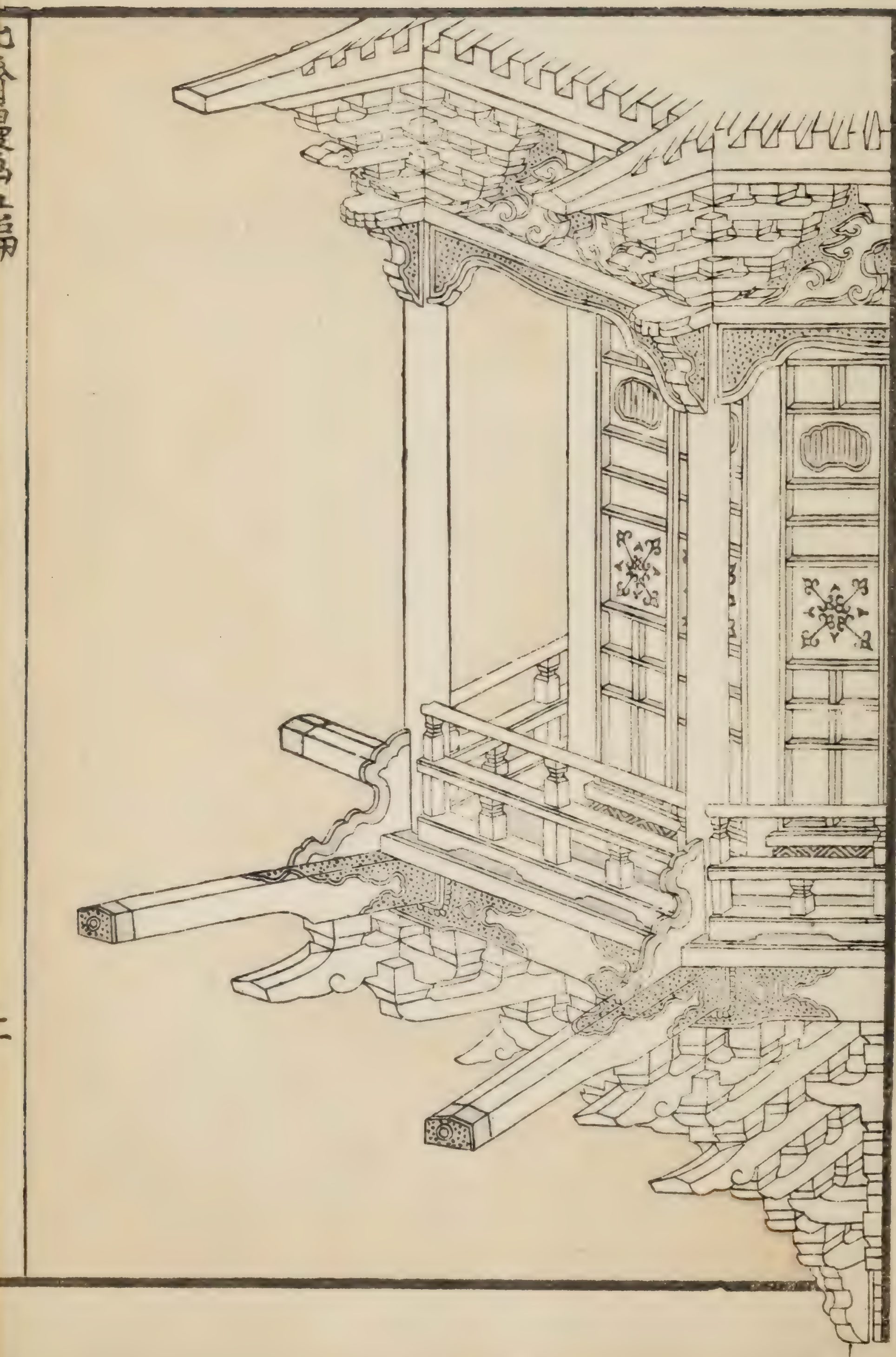
大建元年四月廿七日
本州ふ遷化

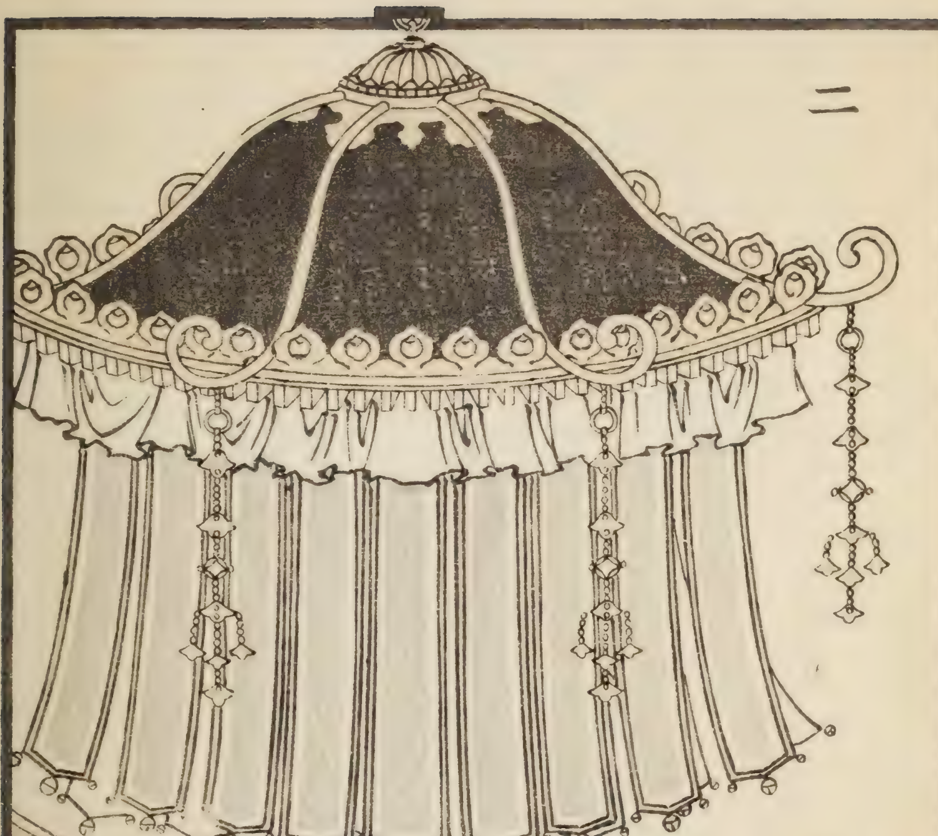
普成





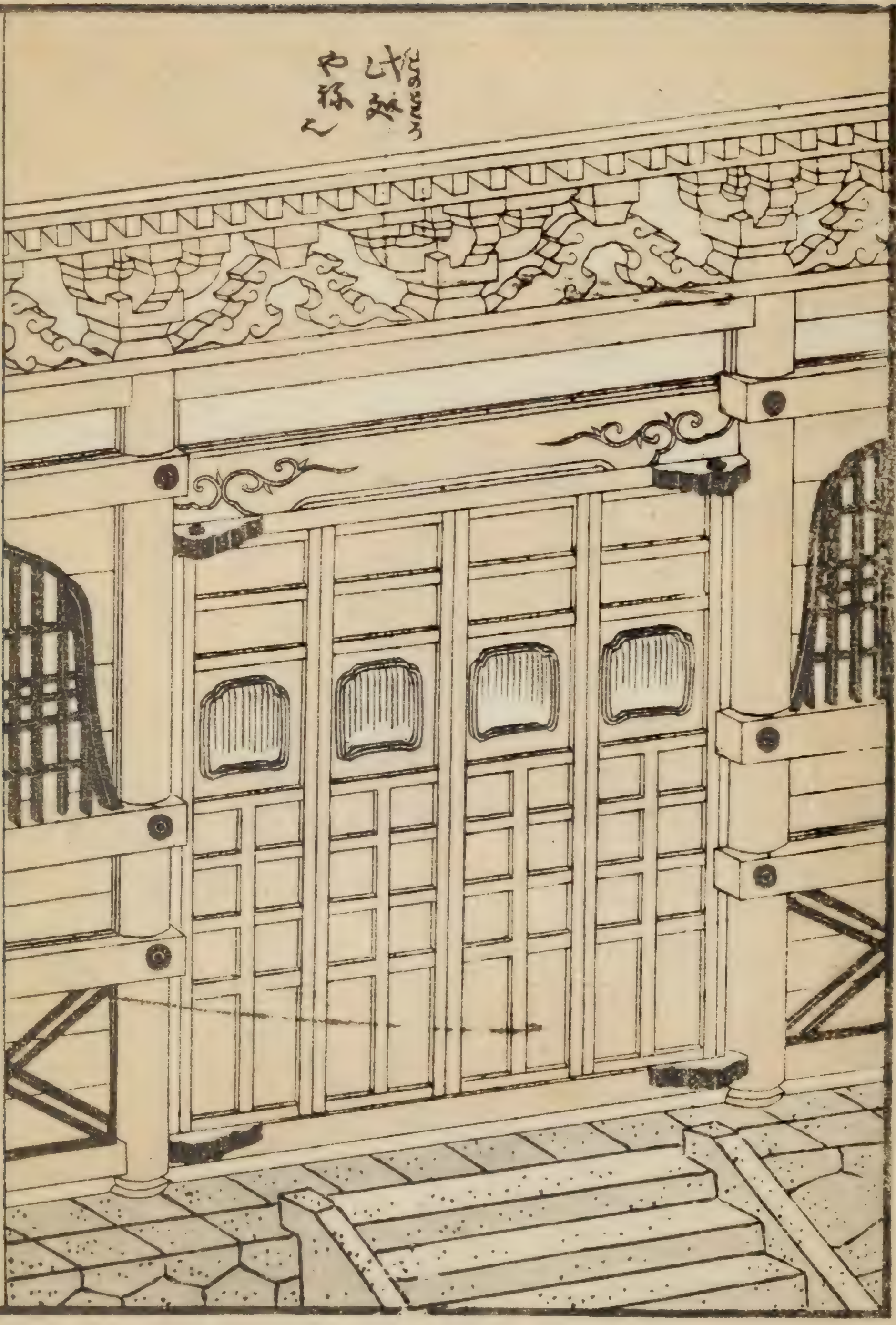
輪藏内（りんざうのうち）



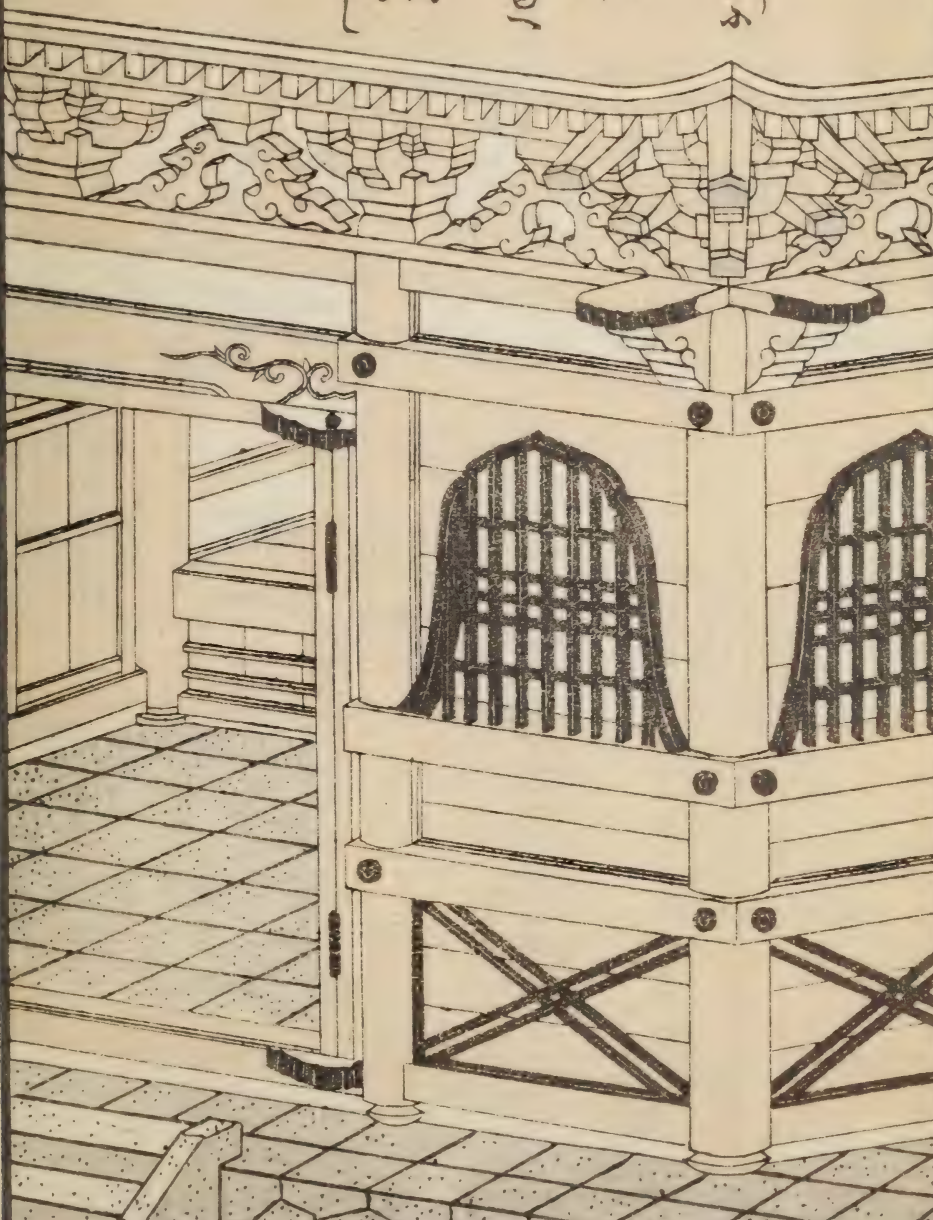

二
天蓋（てんがい）
臺（うてな）

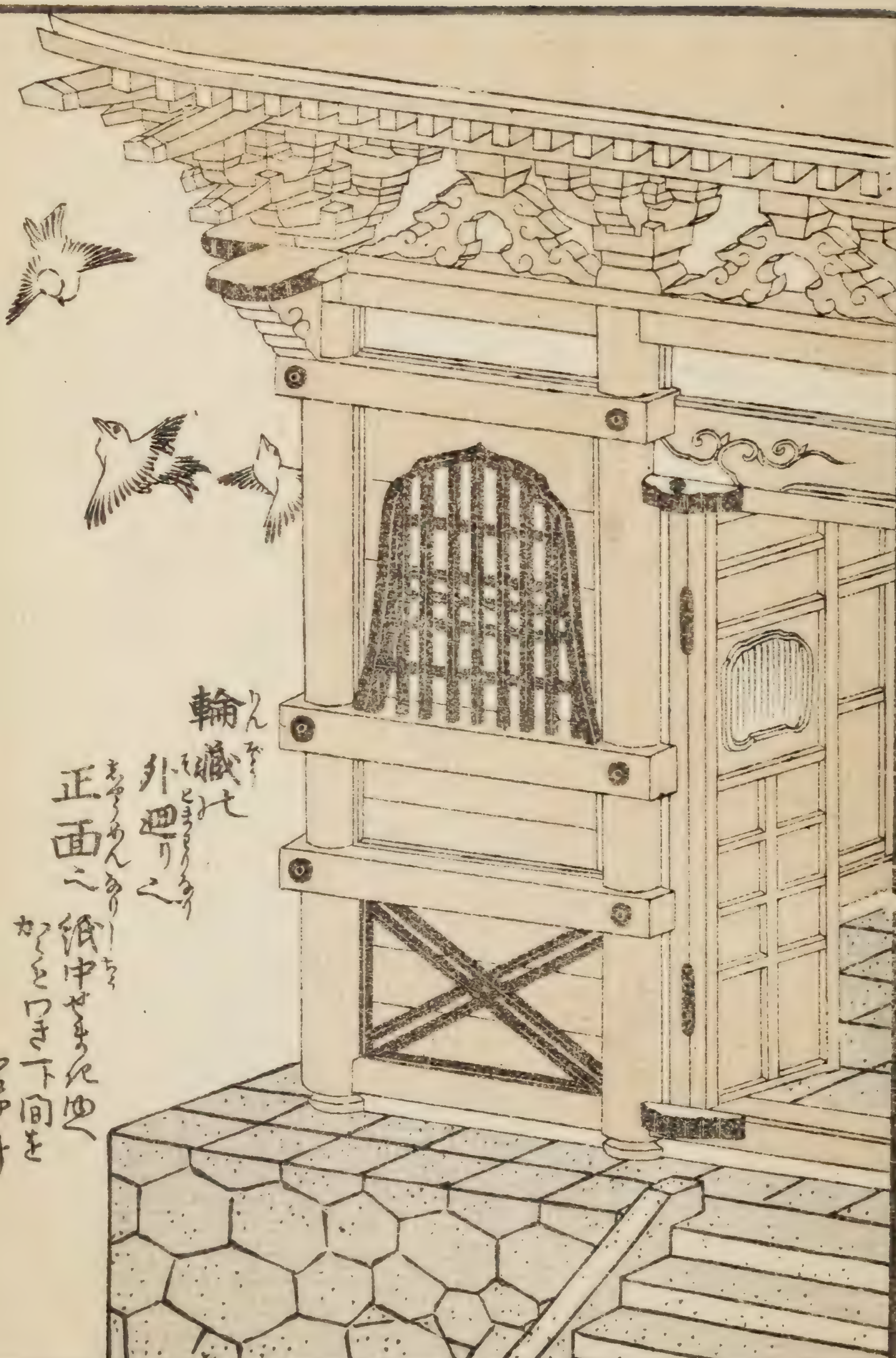

裏文曰
迷悟三界城
悟故十方空
本來無東西
何処有南北
竽
經堂ね
や祢之


経堂やぶの修覆え
三
輪蔵ハ脇正面ニ同じ
製作同じからずといへども丁数おほく次の編ニ譲す

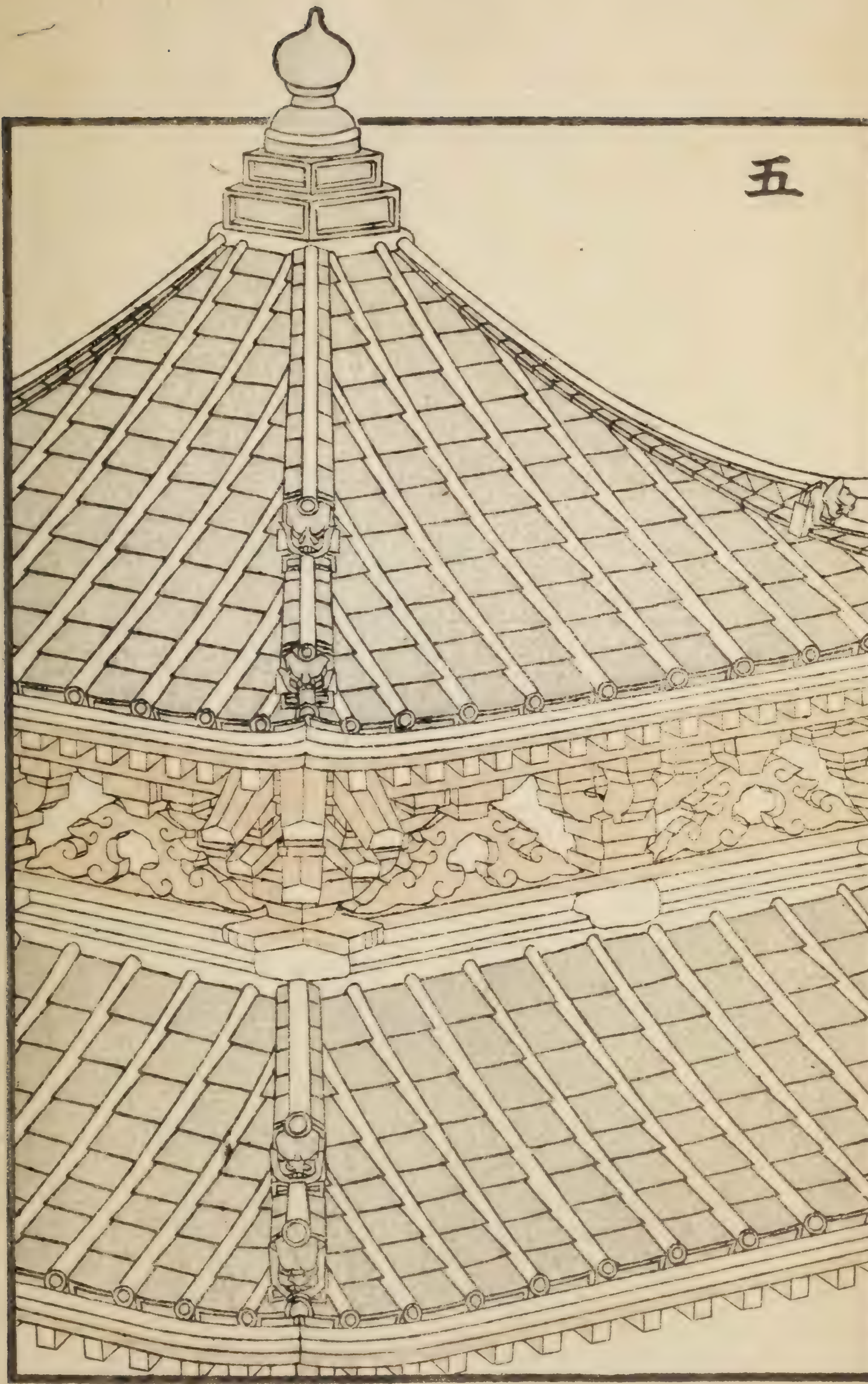


四
波の丁かや稀写す紙中ゆきゝ亘へ大小不同あるべし

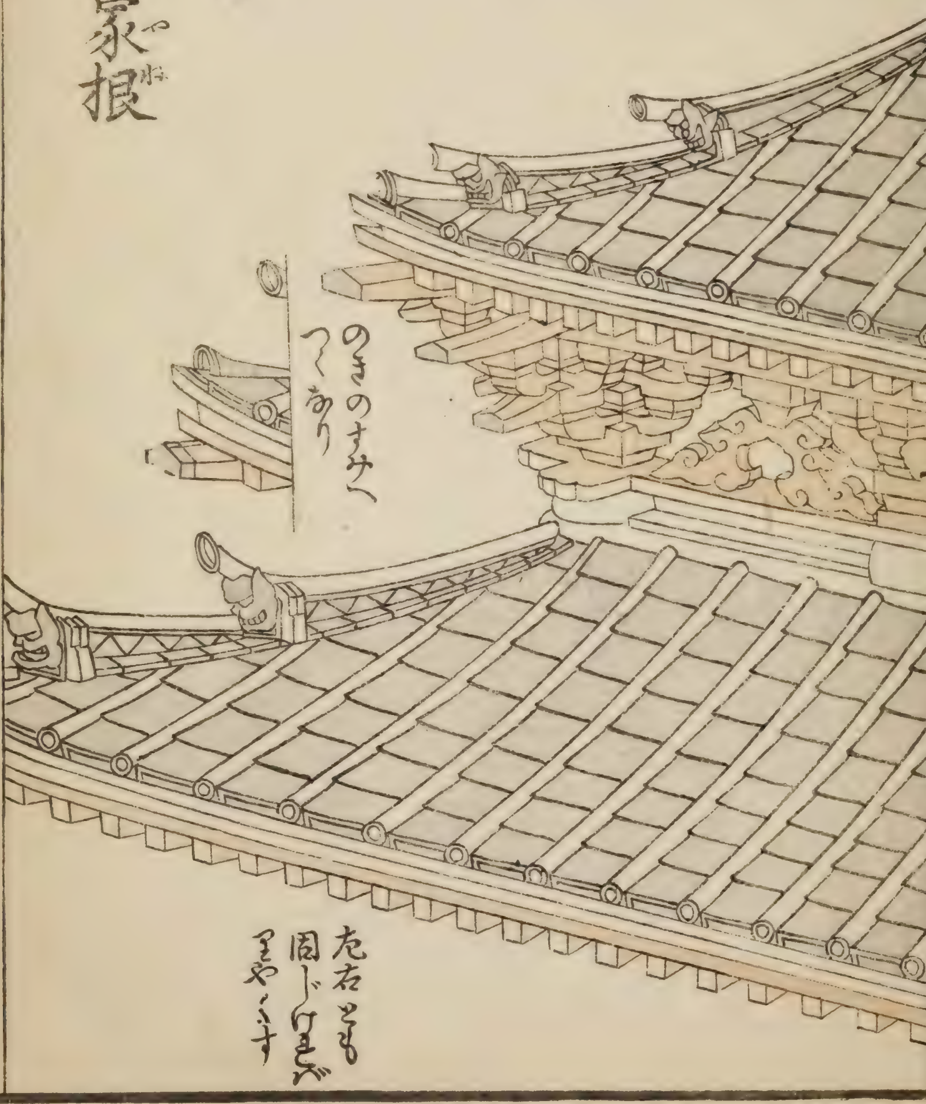




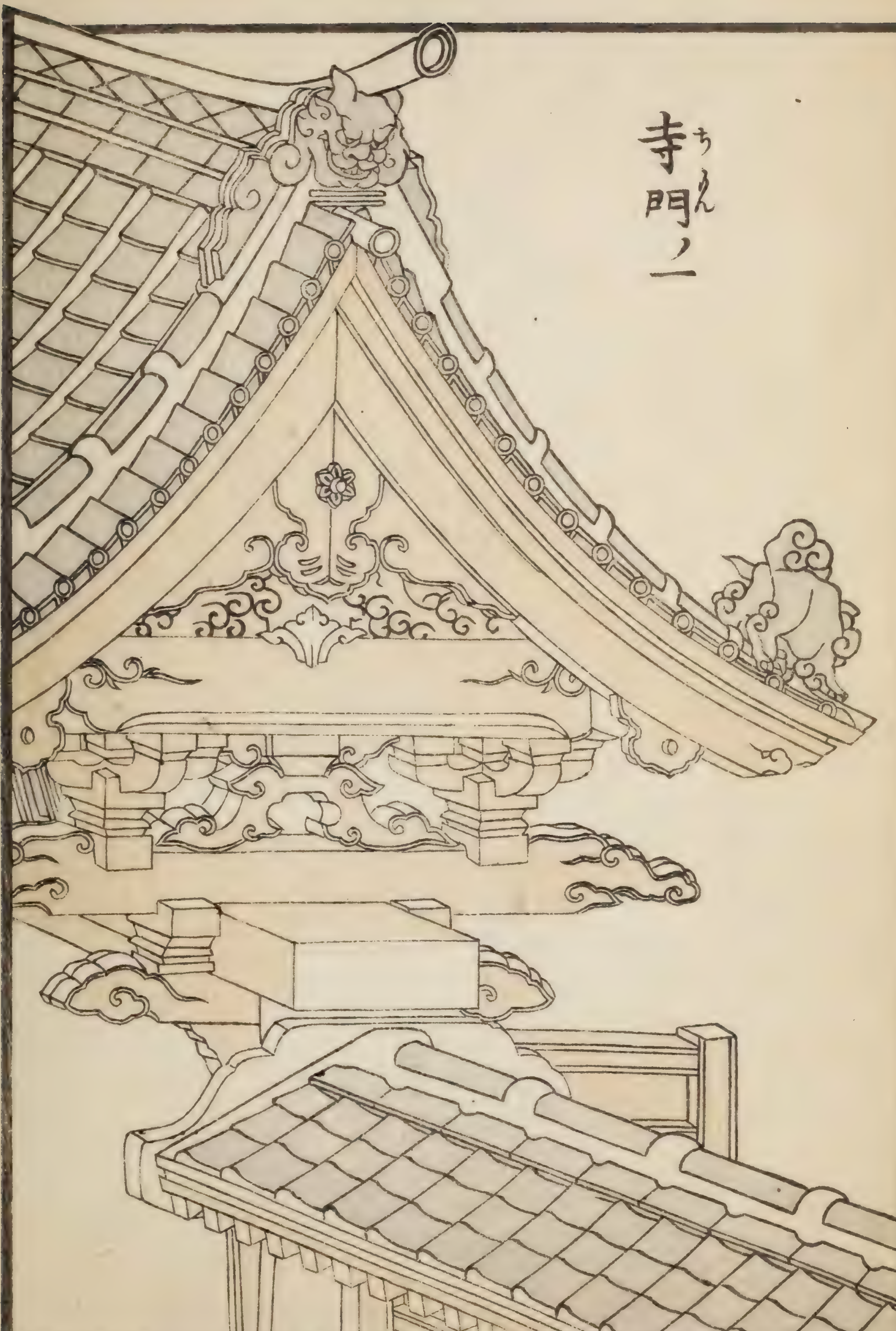
輪蔵之外廻り之正面之紙中せまき故也かくとつき下間を写す

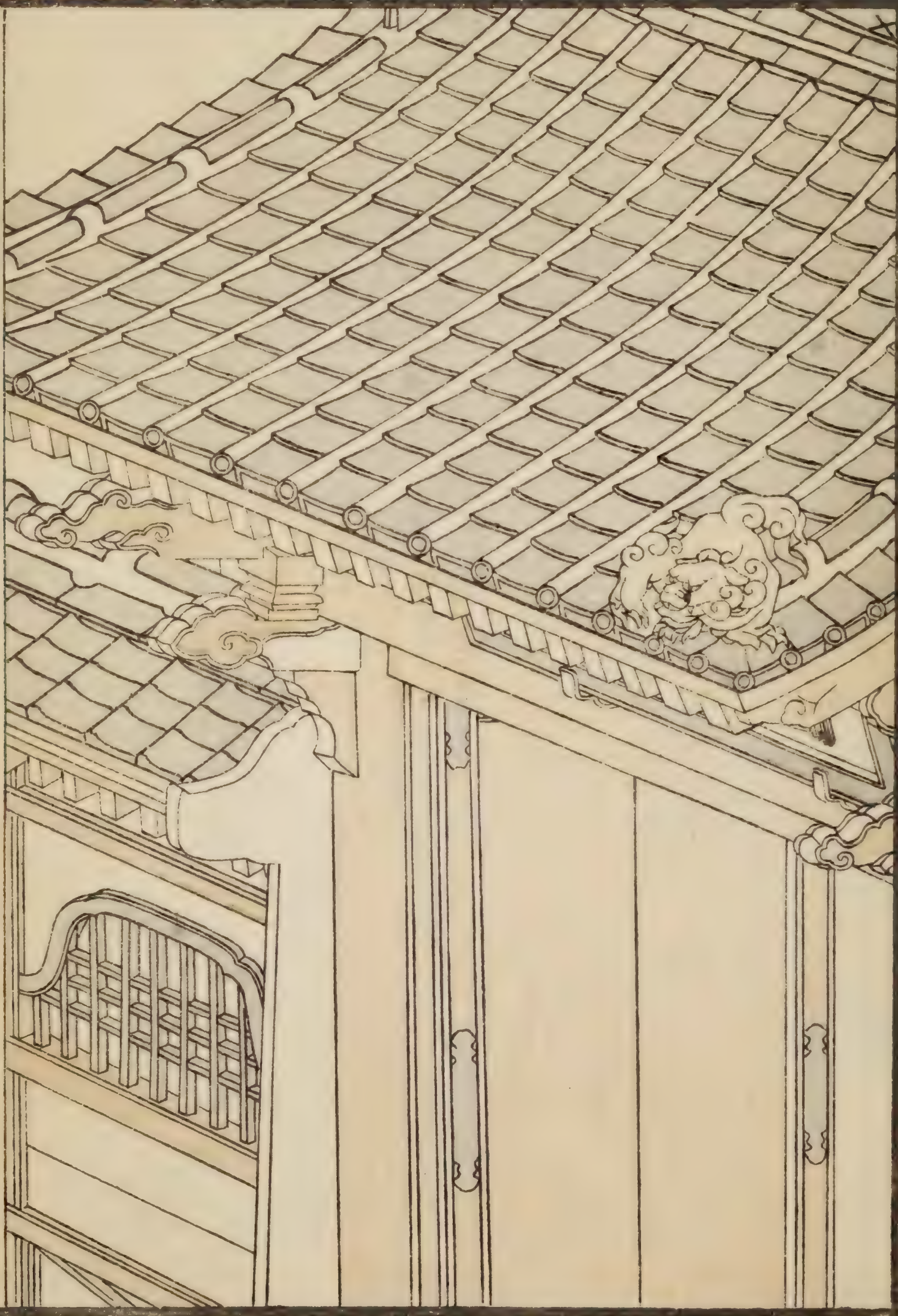

五

輪藏(りんぞう)ノ家根(やね)



寺門ノ一






塀へい
其二


博雅三位


安部仲麿
あべのなかまろ


中納言行平


藤原忠文（ふぢはらのたゞぶん）


伊賀局(いがのつぼね)


藤原實方


柿本（かきのもと）
貴僧正（きそうぜう）


天拝山（てんぱいさん）



楠正成
くすのきまさしげ



力士（りきし）


平正門 たいらのまさかど
老臣公連 らうしんきんつら





御息所（みやすどころ）


守屋大臣（もりやのたいじん）
西行法師（さいぎやうほうし）
山邊赤人（やまべのあかひと）





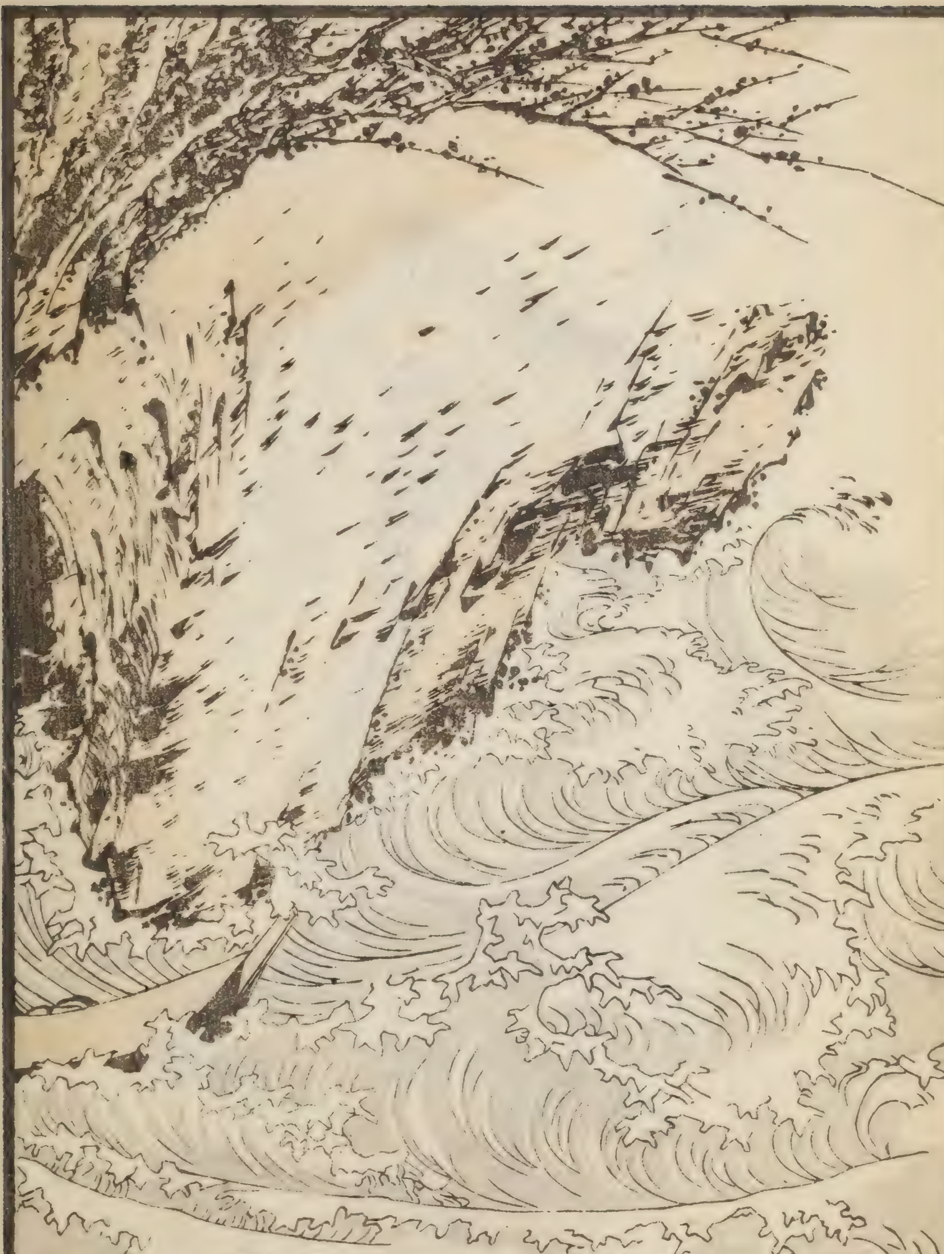

文屋康秀
ぶんやのやすひで
源頼朝
みなもとのよりとも

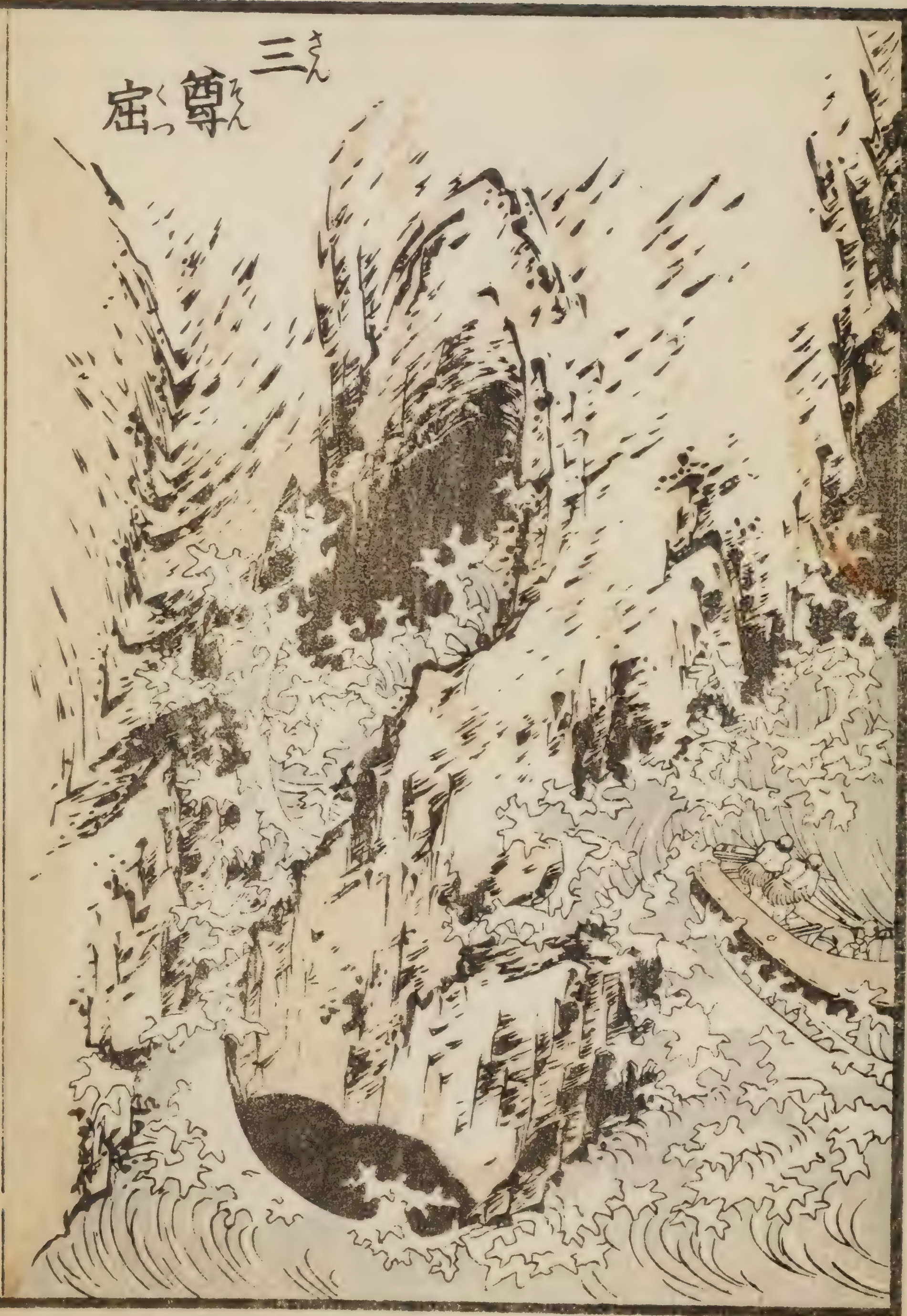

大友真鳥
兼道
大塔宮

猿田彦太神（さるだひこだいじん）




天臼女命
あまのうすめのみこと




三尊窟




摩竭
飢竭

禪宗之伽藍神




大元之像
だいげんのぞう


關公之像
くわんこうのぞう